



リアスの夕陽で泣かせてあげる！

南海部 覚悟

紀伊山脈から、四国山脈と続く列島南部の地殻の皺が、阿蘇カルデラのパンチ穴へと向けて、豊後水道からリアス式に上陸する、九州東海岸――。

地域の中核大分市より、車で一時間半ほど南下した細長い半島の北部、北に開けた小さな漁村の駐在から、所轄の警察署に連絡があったのは、二日前のことでした。

集落の端の小さな入り江に、得体のしれぬ舟が漂着した。漆黒の木造船で近在の漁船とは明らかに違う、密航者が地域に潜伏している可能性があるとのこと。

応援要請を受け、最寄りの佐伯警察署から派遣された十数名の巡査に付随して、黒木玲子と白河笑子の婦人刑事コンビに派遣命令が発令されたのには、大分県警本部に、幾分かの厄介払いの意識があったのかもしれませんが。

なにせこの二人、波風ないところにあえて大騒動を惹起せしめるのが、常のようで……。



「なに！この匂い、臭くって息もできない。」

「磯の香りですよ黒木先輩、のどかでいい香りじゃないですか。」

県警のワゴンから地面に降り立ったなり、婦人刑事コンビの無遠慮な大声が、静かな入り江に響き渡ります。

前に行く中年女刑事は、長いストレートヘアーにパープルのスプリングコート、後を追うギャル刑事に至っては、タンディム庇の鹿撃帽とギンガムチェックのワンピース、鹿撃帽の左右には髪を縛った一対のリボンという出で立ち……ワゴンの中からまとめ役の老刑事が、苦虫を噛み潰した表情で見つめています。

通報された漂着船は、既に住民たちの手で陸揚げされ、黒々とした巨体をコンクリートの岸壁に横たえていました。

全長約6m直径2m程の円筒形で、黒く塗装された木造の外装板が、大きく破損して内部の構造が現れています。

「舟というより、まるで潜水艦ね。」

「なにを載せてたんだろ、誰かが運び出した後なのかなあ。」

「ここから、海底に落下したのかもしれないですよね。」

破損した穴から頭を中に入れながら、白河笑子が呟きます。

「お前ら何言ってる！密航者が乗ってたに決まってるだろ！」

振り返ると、さっきの老刑事が呆れ顔で立っていました。

「他の巡査たちは、密航者の捜査を開始したんだ、君たちは住民の聞き込みに廻ってくれ！」

「聞き込みって？」

「密航者の隠れそうな場所を聞き出してくれ、空き家とか、倉庫とか、誰もいない神社だとか……。」

「——お言葉ですが課長、これは人を乗せる舟とは違うと思います。」

「どうしてだ！黒木君」

「多分この舟は、内部に海水を充てんした状態で、水面下を比較的低速で推進させるのだと思います……もっと専門的に、舟を検証して貰えませんか。」

「ついでに、これも調べてください……外装板の内側に書かれていました。」

そう言って白河笑子が老刑事に見せたのは、デジタルカメラのモニターです。

そこには黄色いパステルの走書きで、不思議な英字の表記がありました。

——UO2:YC——

「確かに、黒木刑事の言うように、水に浮かぶ舟ではないようです。」

大分県警本部3階の会議室――。

幹部数名が、佐伯警察署と繋いだテレビ会議システムで、黒木玲子の要請で臨場した鑑識からの報告を受けています。

「全長6.35m、直径1.98mの円筒形で、外装は黒く塗装された木材（ヒバ材）が、長手方向に張られています。1m毎に厚さ5mmのステンレスベルトで円周方向に補強してあります。」

長い樽のような船体構造が、スクリーンに映し出されます。

「両端はドーム状に成形されたFRP製のカバーで覆われ、イルカのヒレのような方向舵が其々3か所、本体の軸に対し120度の間隔で突き出しています。また、本体の中央付近に、20m以上ある細い金属製のロッドが、先端に浮子をつけた状態で取り付けられ、**GPS**アンテナであることが確認されました。」

「FRPカバーの片方には、ドームの頂点に直径30cmの穴が開いておりステンレス製のパイプが口を開いています。同様な穴とパイプは、本体側面に2か所確認されました。」

「内部構造は、外装のステンレスベルトの位置にヒバ材で出来た円形の仕切り板があって、全体の強度を確保するとともに、内部空間を6つに分けています。外装板が大きく脱落した部分があって、内部の様子が映像で御覧になれるかと思います。」

「仮に、穴のあるFRPカバーの反対側を船首だとしますと、船首側の最初の区画にGPSと航行制御のシステム、次が燃料タンク、船尾側の2区画に燃料電池とウォータージェット式の推進装置がレイアウトされていました。」

「残る2区画には……？」

「なにも入っていません、空でした。」

「――一人が乗っていたのか？」



「重要なのは、外装の木材に一切の防水処理が施されていないことです。」

「目地のコーキングもなければ、FRP防水コートも施工されていません。更に、空だった2区画には、大きなスライド式のハッチがあるんですが、水密パッキンのような防水措置も一切ありません。」

スクリーンには、本体の軸方向に沿ってハッチをスライドさせるシーンが、映し出されています

。

「それで、結論としてどうなんだ？」

「これは人間を乗せる舟ではなく、内部に海水を満たして、水面下20m程のところを、機密裏に物を運ぶ潜航艇だと結論づけました。」

「20mとした理由は？」

「GPSアンテナの長さからです。日本近海で吃水が20mを越える大型船の航行は、マンモスタンカー以外滅多にないので、安全深度です。外装に木材を多用しているのは、アクティブソナー対策、燃料電池動力のウォータージェット推進は、パッシブソナーに備えたものだと考えます。」

「無人で航行できるのか？」

「GPSで設定された座標に、自立して航行が可能です。」

「航続距離は？」

「航行スピードにもよりますが、大体200海里（約370Km）程度だと思います。」

「経済水域の外から侵入できるわけだ、今回の航行経路は分かったのか？」

「今GPS付属のストレージを専門機関で解析中です、多少時間がかかります。」

「外装板が脱落した理由が分かるか？推定でもいいが――。」

「破損部分の木材に、三角形の歯が数枚付着していました、サメだと思います。」

「サメに襲われた海域の見当はつくか？」

「GPSストレージの解析が終われば、何か分かるかもしれませんが、正確な場所の特定は……。ただ、燃料電池の燃料（灯油）が満タンでしたので、目的地に到達して燃料を補填された後なんだと思います。外装板が脱落した位置で制御システムからのラインも破断していますので、それ以降漂流した模様です。」

「――了解した、ご苦労だった。」

スクリーンの映像が消え、遮光カーテンが開かれて、会議室に紅い夕陽が差し込んできました。

「——どう思う？禁止薬物の新手の密輸だろうか？」

夕日に照らされて、県警幹部たちの硬直した顔が一層紅く輝きます。

「余りに手が込んでいます、潜水艦で密輸なんて聞いたことがありません。」

「経済水域の外側まで漁船かなんかで持ってきて、200海里を潜航させて、豊後水道の何処かで国内の仲間が回収するのだろうか？」

「サメに襲われる前に、積み荷を回収したのだろうか？」

「回収した後、舟をどうするんでしょう？アジトに持って帰るってわけに行かんでしょ。」

「燃料を満タンにして、沖合の仲間の漁船に向けて、来た道を返すんじゃないですか。」

「兎に角、GPSの解析結果を待つ他ないようだな……。」

「それと、白河から提出のあった、舟の内側の走書きの件はどうなってる？」

「それも、鑑識に調べさせていますが……どうも本体に掛かりきりで、手が廻らないようですね。みんなそれどころじゃないみたいで。」

「——大体、黒木と白河は今何やってんだ？」

「佐伯市のホテルに泊まり込んで、現場近くの集落の聞き込みを続けているようです。」

「密航者がいないのなら、聞き込み続けても仕方ないだろ。」

「田舎の漁村にあの二人がいる間は、こちらに波風立たないと思いますので……。」

「——それもそうだ。」



「本部長のハゲ親父、厄介払い出来たってほくそ笑んでるんじゃない、今頃。」

「そうですね、刑事を2名も派遣して、佐伯の高級ホテルに期限未定で予約しても何も言っていないし——。」

「それよりあなた、昨夜は痛かったわよ少し……。」

「ごめんなさい……昨夜は新品おろしたてのだったから。じゃ次は、使いふるしたので……。」

「——使いふるして気になるわね。」

「ごめんなさい、先輩のことじゃないですよ……そんなこと、とんでもないわ！」  
顔を赤らめた白河笑子を愛しげに見ながら、髪を束ねたりボンの振れを直してやります。

——この二人、警察庁公認の**LGBT**カップルです。

2年前に知り合い、ときめいて愛し合い、カップルとなりました。

時代の趨勢がLGBTを許容しようとしています。

お堅い行政機関であっても、それを排除することは許されず、特に現政権による政策指導もあって、既に千組を超えるカップルが、公的機関の公認を取得しています。

しかし、現実には強い向かい風もあって、県警への出向という厄介払いは、この二人に今でも課せられる現実でした。

「東京離れてもう2年ね、あなた帰りたいんじゃない？・・・ごめんね。」

「大丈夫！先輩と一緒にですから。」

「昔はね、別々に出向させるのが普通だったのよ。特に男子のカップルの場合ひどかったの、北海道と九州とかね・・・。」

「イジメですよ、悪意を感じるわ。」

「態のいいお仕置きよ！」

「地方に飛ばされても、こうしてあなたと仕事ができるなら私は満足よ、まだ充分じゃないけど・・・いい時代になった。」

番匠川の水面が、夕日に染まる城山史跡を映しこみ、穏やかな時の流れの中で、二人は互いの息遣いを、肌で感じ取っていました。

「そりゃまあ、そうゆう風に訊きゃ、そう答えるじゃろうがのう……。」

集落の南端、小高い丘の中腹に、地域の墓所と菩提寺があります。

菩提寺の住職は、既に90半ばで、顔の下半分に白い髭を蓄えた好々爺です。

「そうなんです、皆さん誰に聞いても、昔は良かった、活気があったって――。」

白河笑子がメモを取りながら、明るく答えます。

「漁師もよかった、百姓もよかった、土方(どかた)も、医者も、教師も、坊主もよかった、そうゆうちよるじゃろうが……。」



年代物の煙管に、刻み煙草を燻らせながら、住職が続けます。

「ピークは40年前じゃったのう、人の数が多い、町営住宅も足らんようになっちゃって……佐伯と合併前は鶴見町ちゅうとったんじゃが、町役場の連中も活発で、東京の芸能プロダクションに地元の歌謡曲つくらして、有名な演歌歌手に歌とって貰ろうて、それなりヒットもしたもんじゃあが。」

「県知事の発案で、一村一品ゆうて、鶴見も海産物大いに宣伝して回ったんじゃあが、鳴かず飛ばずじゃったのう……他の町村じゃあ、いい塩梅もあつたにいのう。」

「その内、気い付いたら年寄しかおらんようになって……佐伯と合併すんで、経済圏拡がるじゃーいいよったけんのう、益々人がおらんようになって、空き家が増えて、向こう三軒両隣、誰もおらんちゅう家も出てきてのう。」

「佐伯じゃスーパーに代わって、コンビニがぼちぼち増えとったが、こっちは昔からやっとなる雑貨屋が、どんだんのうなってしもうてのう。」

「空き家対策に市が家主の間に入って、古い民家改装して、光ケーブル引き回してのう、外国企業のOA技術者に貸家で誘致してみたんじゃあが、あいつらコンビニがねえとダメちゅうけえ、市も一年で放り出しちよったわあ。」

「農業や、漁業じゃもうダメなんですか？」

「魚もみかんも、加工品は値段が輸入にかなわんじゃろうが……後継者もおらんし、佐賀ん関みたごと高級品でやれりゃあいいけんのう。」

障子を開け放った本堂の板の間に、長い参道の石段から吹き上げる昼下がりの潮風が、怠惰に弛緩した時間を運び上げてきます。

「岬の突端に旧海軍の砲台の跡があつての、5年前外資系の化学メーカーが、そけえ工場造って

進出してきたのが、最近の大きな話題ちゅうことになっちよる。」

「近在の土方が根こそぎ駆り出されて、大規模な建設工事に多少は潤ったもんじゃ。」

「何を作る工場なんですか？」

「産業用の火薬ちゅうとったのう——。砲弾と装薬を保管しちよった海軍の地下施設、そんなま使こうて、火が出たら一気に海水放り込めるきい、火薬作るにゃ都合がいいわけじゃ。廻りに民家もねえし、最初は火薬に反対しとった住民もおったが、背に腹は代えられん、少しでも雇用に寄与するんならちゅうことで——ふたを開けたらガッカリじゃ。」

「どうしたんです？」

「この手の工場、いま殆ど無人じゃちゅうんじゃ。雇われたのはほんの一部の技術者だけでの、建設工事が終わったら、土方は皆お払い箱じゃった。」

「その工場の話、もっと詳しく訊きたいんですが……。」

黒木玲子が身を乗り出します。

「——じゃったら、電気技師で2年間働いちよった男が、寺の下に住んじよるけえ、後でわしから電話しとっちやるわ。」

「夜にならんと帰らんがいいかのう？」

「勿論です、お願いします。」

「はい、確かに砲台跡の化学工場で、2年間働いていました。いえいえ出身は東京です、魚釣りが好きで、定年前に脱サラして此処に移り住みました。安定した収入先が無いものですから、あの工場の仕事は好都合でした。」

「———どんな火薬を作っていたんですか？」

「車のエアバック用から、採石場の発破火薬まで様々ですねえ、砲台がある岬の下の入り江に、工場の建屋と事務所があったんですが、50人位が働いていました。火薬の製造は全てオートメーションでやってましたから、あの規模の工場としては、従業員は少ないと思います。」

「地元からの採用は、私を入れて20人でした。道路が無いものですから、会社が準備した通勤ボートで通っていました。」

「住職さんの話では、旧海軍の地下施設そのまま使っていたそうですが？」

「はい、入り江に波止場があって、海軍はそこから地下の弾薬庫に砲弾と装薬を運び入れていたようです、弾薬庫に何かあった場合ただちに海水を導入できる設計と聞いています。」

「地下弾薬庫から、岬の上の砲台まで3本の立坑が建ち上がってまして、昔は大きなリフトが中であって、砲弾と装薬を運び上げていたようです。」

「その弾薬庫と立坑の内2本に、かなりの規模の化学プラントが建設されていて、火薬製造の心臓部だと聞かされてました。全てオペレーションルームからの遠隔操作で、常時中に人はいません。電気設備の点検で、何回か中に入りましたが、異様な臭気とひどい湿気で、長く留まれたもんじゃないませんでした。」

「勤務していた2年間で何か変わったことは？」

「そうですね、工場が稼働して半年位は、受電容量不足で苦労しました。九電から高圧で受電しているんですが、変電設備がすぐにオーバーロードするんです、緊急にガスタービンの発電機を2台導入しましたが、それでも余裕はありませんでした。弾薬庫のプラントが相当電気を喰ったようですね。」

「———それが、半年後からピタッと容量不足が無くなって、逆に九電に売電もできる状態になりました。立坑のプラントの不具合が解消されて、全体の電気使用量が下がったと説明されましたが、私が見るところ使用量が下がったんじゃないくて、工場の何処かで大量に発電されてるようなんです。」

「工場の内部の写真か、何かありませんか？」

「私のいた工場建屋や事務所、波止場の写真はありますが、弾薬庫と立坑内部のプラントは撮影が禁止されてました、企業機密ゾーンなんだそうです———。それが、私の同僚に不届きな奴がいてね、オペレーションルームの電気設備の点検中に、工場の監視カメラのストレージが直接インターネットに接続されていることに気が付いたんです。ログインコードが工場長の指紋だったそうで、アクセスに苦労したらしいんですが、退職した後、プラント内部の映像だといってファイルを送ってきました。」

「見せて貰えませんか？」

「出所を伏せて頂ければ、データ一差し上げます。」

（地下監視**No7**）と見出しのある映像には、矩形の大きなコンクリートの部屋に、金属製の筒のような装置が一面に並び、複雑な配管が取り巻いています。

「この装置で、火薬の原材料の不純物を取り除くんだと、説明されました。」

（立坑監視**No3**）とある映像には円形の立坑の床から、金属製の棒が無数に突き出て上部の巨大な装置に繋がっているようです。何れも監視カメラの調整が取れていないのか、画面が時々チラつきます。

「其処彼処に、黄色い粉末と黒い粉末の入った大きなボトルが大量に置いてありましたが、何に使うのか説明はありませんでした。」

「完成した製品ってどの様な物なんですか？」

「――それが変なんですよ、てっきりダイナマイトのような筒型の代物だって思ってたら、サッカーボールのような球形の容器に固めて入れるんです。」

「それは、どうして？」

「火薬はどうしても不安定だから、一定量を厳密に区分けして頑丈な容器に収める、表面積が最も小さい球体が一番いいんだ、と説明されました。容器を組み立てる技術者も限られていまして、特に一番デリケートな部分は工場長（マネージャー）が一人でやっていた、その作業中は工場全体ピリピリしていましたね。」



話を訊き終り、ワゴンを停めた岸壁まで下りてくると、陽の落ちた海の対岸に、水際の灯りが一直線に拡がり、波間に反射して明滅を繰り返しています。

山から吹き降ろす乾いた夜風が爽やかで、思わず抱き寄せた笑子の唇に、玲子は優しく自分のそれを重ねました。

「玲子さん、部長からメールです……。」

白い**ipad**を差し出しながら、白河笑子が眠そうな声を上げました。

受け取ったタブレットを掛け布団の上に放り出し、腕を笑子の肩に廻して、その唇を奪います。白い肌を寄せ合いながら、敏感な部分に手を這わすと、昨夜の余韻が早朝の気怠さと共に甦ります。

「携帯に電話すればいいのに……。」

黒木玲子も眠そうな声を上げます。

「あれで、気を使ってるんですよ。」

笑子が悪戯っぽく耳元で囁きます。

「漂着船のGPSストレージの解析が終わったって……出発地点は日向灘沖合の公海上、到着点は佐伯市大字大島沖合、サメに襲われたのもその近くみたい……舟はサメに襲われた後、急浮上しているから、恐らくその時に積み荷が落下したんだろう、その地点の海底の調査を開始するって——。なにこれ！」

ipadを掴んで身を起こします。

「どうしたんです？」

「詳細な解析によると、舟はこの間を過去60回以上往復しているんだって！」

「もう一通メール来てますね。」

笑子が横から覗き込みます。

「昨日の電気技師からよ、帰り際に頼んでおいた地下弾薬庫と、立坑の見取り図が届いたんだわ。後で昨日の監視カメラの画像ファイルと一緒に、県警本部に送っておいて。」

突然玲子の携帯が鳴動します、慌てた様子の刑事部長の声が受話器から聞こえてきました。

「今朝のメール読んだか！ひとつ言い忘れたことがある。舟の裏側にパステルで書かれていた文字の件だが、文字の意味はまだ解らんが、パステルの成分を分析したら、ごく微量だが放射性アイソトープの反応が現れた、現在物質名を特定中だ。積み荷の受取人に心当たりついたか！」

「目星を付けた化学工場が近くにありますが！今から、そこの工場長（マネージャー）に会ってきます！」

早朝のホテルに、中年女刑事の甲高い声が響き渡ります。

「——だから、最初から電話すりゃいいのに。」

笑子が横でクスクス笑っています。



「——その舟の積み荷の受取人が私たちだと、おっしゃるんですか？」

化学工場のマネジャーと面会したのは、佐伯港に近いレストラン・小山の個室ブースでした。

日本語も流暢な小柄な白人で、カールした黒髪からラテン系かと思われます。

「そうは言っていません、まだ積み荷が何であるかも特定されていないんです。ただ、積み荷が海外からの密輸品の可能性があります、あの地域で外資系の工場は御社だけですから、周辺にあらぬ噂を広めない為にも、質問にお答え頂きたいのです。」

「私どもは、この国の複雑な法規制をクリアして、5年前にこの地に進出してきたんです、現在でもコンプライアンスは完全に維持されています、国の定期的な検査も受けていますし、違法な事案は一切ありません。」

「なぜあの、辺鄙な場所に？」

「最良のロケーションだったからです、ご存じのように火薬や爆薬の製造は大変特殊なものです、民家の近くに立地できませんし、乾燥した環境もノーグッドです、今回は既設の地下施設と波止場が利用できたのが、最大のメリットでした。」

「職員の地元採用を一時大量にされたようですが、工場稼働後一気に減らした理由は？」

「地元採用は施設の建設が主な目的でした、先ほども言いましたように製品が火薬・爆薬ですから、工場を稼働させるにも特殊な技術が必要です。一部の設備メンテナンスの要員を除いて、工場がほぼ完成した2年目に解雇させて頂きました。」

「電力会社から訊いたんですが、最初は受電の容量不足で変電設備の事故が多発した、その後電力が余るようになったようですが？」

「それは自前の発電設備が稼働し始めたからです、酸化・還元炉というのが2基動いていまして、そこから出る排熱を利用して発電しています。」

¥880の Pasta・ランチの前菜を、器用にフォークでまとめながら、急に思い立ったように

、「——何でしたら、明日工場をご案内しましょうか？」

「見学可能ですか？」

「指定した場所での撮影を、ご遠慮さえいただければ大歓迎です。私は同行できませんが、現地のスタッフに指示しておきます。」

「操業中に、ご迷惑じゃないですか？」

「工場は、この一週間在庫調整で休業中です、なにせ在庫がたまるのが一番危険ですから……。」



「舟に乗るなんて何年ぶりかしら、潮風が爽やかで気持ちいい！毎日通勤で乗れるなんてうらやましいわ。」

化学工場への通勤ボートは、佐伯港から東へ、リアス海岸の絶景の中を航行します。ボートの白い航跡の上空を、ウミツバメの群れがどこまでも追いかけてきました。

「先輩にひとつ訊きたいんですけど……。」

「なあに？笑ちゃん。」満足そうな眼が輝いています。

「部長はまだ分からないって言ってましたけど、パステルの走書きの意味、先輩もう分かってるんじゃないですか？」

「どうして……。」

「だって、昨日ホテルに届いた先輩宛てのAmazonの商品、線量計って書いていましたよ。」

悪戯っぽく笑子の顔を覗き込んで、「——あなたの分もあるわよ。」

クリップの付いたペンのような線量計を差し出しながら、「あの後ね、私の友人にメールを送ってみたの、すぐに返事が来たわ。**UO2**は二酸化ウランに決まっているだろ！何勉強してたんだ！——って。」

「**YC**は？」

「イエローケーキ！つまり、天然ウランの密輸船だったのよ、あの舟。」

「その、先輩の友達ってというのは？」

「高校の化学の先生！」



工場のある入り江にボートが到着し、ブルーの作業服を着たスタッフ2名が出迎えてくれました。

「早速ですが、静電防止用の作業服とヘルメットを準備していますので、事務所でお着替えください。」

入り江の奥に広がる整備された平地に、充分に間隔を於いて建てられた工場建屋は、全て鉄骨の平屋建て、通常と異なるのは、建物ごとに軒の上まである大きな土塁に四方を囲まれていることです。

「頑丈なコンクリートの建物じゃないんですね？」

「事故があった場合、コンクリートじゃ被害が大きくなるんです、建物を犠牲にして、爆風を閉じ込めないような設計です。」

笑子が深く頷いて、納得しています。

「――地下工場に入ります、これ以降のカメラ等撮影はご遠慮ください、足元が暗いですから充分お気を付けください。」

背の高いイケメンのガイドが先頭に立ち、もう一人が後ろに立って長い階段を下りていきます、天井の要所要所から大型の監視カメラが、威圧するように見下ろしています。

大きな鉄の扉を開くと、一気に視界が開け、高い天井の広大な空間が広がっていました。

巨大な魔法瓶のような円筒形のタンクが整然と並び、無数のパイプがタンクの間隙に犇めいています。

「爆薬や火薬は、基本的に燃料と酸化剤で構成されています、そのどちらにも不純物が存在すると、十分な出力が得られませんし、不安定で大変危険です。ここでは同時に10種類の原材料の不純物を取り除き、精製することが出来ます。」

「爆薬と、火薬の違いは？」

ヘルメットを片手で押さえながら玲子が尋ねます。

「燃焼速度の違いです、音速以下が火薬、以上が爆薬。」

広大な地下工場から一転して、直径8m程の円筒形の部屋に出ました。

壁の岩盤がむき出しで異様な雰囲気です、相変わらず天井には複数の監視カメラが見張っています、上部に複雑な装置があって、そこから降りてきた30本程の金属の棒が足元の床を貫いています。

「此処は旧海軍が掘った立坑の中です、このすぐ下に酸化・還元炉と称しています化学反応炉があって、自然界に酸化物として存在する様々な化合物・金属を、この炉を使って穏やかに還元しています。出力が大きく安全で精密に制御できる新しい製品を、ここで研究・開発しているわけです。」

「じゃあ、還元炉で充分じゃないですか、酸化・還元炉というのは？」

柄にもなく笑子が、専門的な質問をします。

「どんな反応も、酸化と還元が並行して起きています、話が専門的になりますが、要は電子の遣り取りなんです、酸化される物質が電子を放出し、還元される物質が電子を受け取って……。」

「酸化される物質に何を使ってるんですか？」

「粉末の黒鉛です。」

「じゃ、いくら穏やかな反応でも熱が出ますよね。」

「はい、水を循環させて冷やしています。この上の階に蒸気タービンを使った発電機がありまして、工場で使う電気を賄っています。」

「海軍の立坑はここだけですか？佐伯市の資料によると3か所あったように書いていますが？」

「酸化・還元炉がもう一基このすぐ隣で稼働しています。残る一つの立坑は、更にその隣に、抗壁をコンクリートで補強して製品の爆破試験場に使用しています。」

――その時でした!!

頭上で鈍い破裂音がしたかと思うと、突き上げるような振動と加圧された空気の衝撃が足元から襲ってきました、天井の装置が粉々になって落下し、真っ黒い粉塵であつという間に視界が奪われます、甲高い笑子の悲鳴に重なって、「チキショー！埋められた！」というガイドの声が聞こえてきました。

佐伯市大島沖で、底引き網に奇妙な球体が掛かったのは、佐伯に木造船が漂着する前日のこと  
です。引き上げたのは佐伯とは海を隔てた、四国宿毛港の漁師でした。  
サッカーボールほどの大きさの金属の球体で、無数の木切れと一緒に網に絡まっていたので、後  
で網を解くつもりで、漁港の漂流ゴミ置き場に据え置かれていました。  
警察が佐伯沖の海底を調査しているのを訊きつけて、漁師仲間が漁協に届けたのでした。



連絡を受け、高知県警の鑑識が宿毛港へ向かいました。  
漁協の地下に安置された球体の表面には、無数の歯形が残されています。  
「――サメだな、何度も噛みついてやがる。」  
「歯も何枚か残ってますよ、エサと間違えたんでしょうね――。」  
表面にある小さなビスを外すと、外装の金属カバーが二つに割れて、透明な樹脂で保護された複雑な回路（プリント基板）が現れました。  
「こりゃまずいな、本部に連絡して処理班を依頼！我々は宿毛署に協力して周囲の安全確保。」  
自衛隊爆発物処理班による屋外非破壊検査の結果は、警察庁・防衛省に止まらず、政府首脳・内閣を震撼させました。  
X線CTを使った断層映像の解析によると、プリント基板の下は32面の爆縮レンズ構造、その下は恐らく炭化タングステンの中性子反射体、中心は――核物質**PU239**――  
プルトニウム核爆弾に他ならないとの報告でした。

緊急の閣議の結果、当該事案は特定秘密保護法の対象と規定され、必要な部局以外の箝口令が徹底されました。  
その矢先、佐伯市で工場大爆発のニュースが飛び込み、期せずしてマスコミの関心が、責任者である工場マネージャーに集中して、その動向が周知に晒される状況となりました。  
大分県警本部長宛てに、国家公安委員会から緊急の呼び出しが届いたのは、そのような経緯の下でした。

黒木玲子と、白河笑子が立坑の中から救出されたのは、爆発から10時間後のことでした。  
製品の爆破試験に使われていた、3本目の立坑に逃げ込んで最悪の結末を逃れました。  
二人とも鼓膜を損傷し、無音の中で必死に助けを求めましたが、携帯電話の微弱な電波と、電気技師が送った工場の見取り図とが決め手となって所在が特定され、意識が朦朧としかけた直前に

助けられました。

化学工場は全てが破壊し尽くされていました、2本の立坑は上部構造が崩壊し完全に埋没して、砲台のあった岬の突端が大きく陥没しています。

地下工場には大量の海水が浸入し、瓦礫と共に水没して、当面はダイバーも潜れない状況です。後日の詳細な検証により、この大爆発は大量の黒鉛による粉じん爆発であることが確認されました。

5日後のことです、二人の病室に優しい表情で、刑事部長が入ってきました。

「どうだい、もう耳は聞こえるのか？」

「ええ、ご心配おかけしました……。」

ベッドから身を起こして、黒木玲子が答えます。

白河笑子は軽く会釈して、「部長が場所を指示してくれたんですってね！」

「工場の見取り図を送って貰ってたのを思い出してな、携帯電話の発信位置と重ね合わせたら、立坑の中だった。」

「密輸事件の海底調査に伴って、水上警察とヘリを配置しておいてよかった、10分で水上警察が現場に入れたそうだ。」

「私たち以外に、けが人は？ガイドさんが二人同行してくれてたんですけど……。」

「その二人なら現在集中治療室だ、実際かなり厳しいらしい……今のところ、犠牲者は出てないが、君たち以外、工場に人が居たかどうかははっきりしないんだ。」

「密輸事件のその後進展は？」

「密輸品の現物がまだ出てきていないからなあ……それについて君たちにひとつ聴きたいことがある。そもそも、君たちは何の為にあの工場を見学したんだ？」

「何かあったんですね？」黒木玲子が身を乗り出します。

「一昨日、国家公安委員会からうちの本部長が緊急に呼び出しを受けた、——今回の工場爆発と密輸事件を結びつけて考えてるのかって、それなら早く工場の責任者を検挙しなさい、大分県警が動かないなら外事情報部が指揮を執る——、と言われたようだ。工場長はマスコミの注目を集めていて下手なことじゃ逮捕もできん、外事情報部が動く位だから、余程のことだと思うが、例によって官僚は何も教えてくれんとぼやいていた。」

「外事情報部の下には国際テロリズム対策課がありますよね……。」

急に笑子の方に向き直ると、大声で。

「——笑ちゃん、退院よ！準備があるから早くして！」

「——は、はい！」

「さあ、部長！下手人をしょっぴきに行きましょう——。」

「あなた方、無事だったんですね！よかった……。」



工場マネージャーは、ずっと逗留している佐伯駅前のホテルに缶詰めの状態でした。

マスコミ取材陣のカメラの放列が、廻りの歩道を埋めています。

部屋の窓から、歩道を見下ろすマネージャーの背中に、玲子が声を掛けます。

「ガイドして頂いたスタッフのお二人、ご心配ですね。」

「助かって脳に後遺症が残るって医者に言われました、私の責任です。」

「現場はあれからご覧になりましたか？」

「こんな有様で、病院に見舞いにも行けないんです。どうしろと言うんですかね、日本のマスコミは……それで、今日は何か？」

「実は、先日の漂着船のことなんですが、外装板の裏側に妙な走書きがありました、**UO2 : YC**って書かれていたんですが、お心当たりは？」

「———勿論、ありません。」

「文字の意味は解りませんが、積み荷の受取人が書いたものかも知れませんが、筆跡を確認したいんです、同じように書いて貰えませんか？」

「断じて心当たりありませんし、そもそもパステルなんかで筆跡が分かるんですか？」

ハッと驚いた気配を間に挟んで、「———なぜパステルと分かります？誰もそんなこと言っていないんですけど。」黒木玲子が追い詰めます。

慌てた様子もなく、「海水で濡れた木材にきれいに文字が書けるとしたら、オイルパステルぐらいしか思いつかないじゃないですか、それとも余程特殊な走書きだったんですか？」

「パステルの成分から、ごく微量の放射性アイソトープが検出されました。それで、御社の通勤ボートも検査させて頂きたいのです。」

「———同じ反応が出るって言うんですか？当社が密輸の荷受人とでも思ってもらえるんでしょうか……。うちのスタッフは日頃から様々な火薬原料（金属）に接しています、その中には多少の放射性同位体の混在も、考えられないことも無いんですよ！」

流石に、言葉の裏側に苛立たしさが感じられます。

「直ぐに承諾頂かなくても結構です、ボートは工場の波止場に水没していて、証拠保存にも問題ありませんから……。もう一つ、お願いがあるんですが。」

と言いながら、笑子に持たせていた重そうなバッグを、目の前の机に上げさせました。

「これは、県警の別の部門からの依頼なんですが、どうしても工場爆発の瞬間の映像が欲しいん

です、監視カメラの映像を探したんですが、オペレーションルームが完全に破壊されていて、サーバーの復元も不可能のようで……。」

バックを開けて中の物を笑子を取り出すと、マネジャーの顔色が見る見る変わります。ラテン系特有の紅みがあった健康的な肌色が一気に青白くなり、眼を一杯に見開くと、今度は一転どす黒く変色しました、額に脂汗が噴出しています。

「一台だけ無事だった監視カメラがありました、ストレージが内蔵されているようで、USBコネクタから吸い出そうとしたんですが、パスワードが分からなくて……マネジャーのパソコンならデータ吸い出せるかと思って、現物持ってきました。」

バッグからは所々黒く変色した、監視カメラの本体そのものが出てきました。

今にも泣きそうな表情でわなわな震えながら、「触るな！伏せろ！起爆シーケンスは起動しているんだ！ホテルが吹っ飛ぶぞ！こっちに持ってくるな！」

それだけ叫ぶと、両手で頭を抱えて、部屋の隅に蹲ってしまいました。

「これに何を仕掛けたの！泥を吐きなさい！」

両眼を見開き鬼気迫る表情で、マネジャーの前に仁王立ちした黒木玲子が、胸ぐらをつかんで顔を上げさせると、虚ろな眼で監視カメラを確かめた後、観念したように悲しげに瞼を閉じて、

「コンポジション**C-4**プラスチック、全ての監視カメラに仕掛けました……。インターネット経由で私のパソコンから起爆できるようにしてあります。」

「あなたが、起爆したのね！」

何も言わず、黒いカールの頭を深々と下げました。

「黒木！裁判所から逮捕状が下りたぞ、そいつ逮捕しろ！しょっぴけ！」

逮捕状を振りかざしながら、刑事部長が、部屋に走りこんできました。

宿毛市で発見されたプルトニウム核爆弾の電子基板部分から、工場マネージャーの指紋が採取されたことにより、国家公安委員会の指示で、警察庁が逮捕状を直接請求、取得しました。罪状は、日本に核兵器製造を規制する法律がないため、当面、放射線障害防止法違反と記載され、その他の罪状の立証を待って、再逮捕することとされました。

のちの調査により、酸化・還元炉と称された化学反応炉は、プルトニウム239生産のための黒鉛炉であり、地下工場の設備は、二酸化ウランから六フッ化ウランに転換、ガス化して遠心分離を行う一連のプラント（カスケード）だったと報告されます。カスケードでウラン235を濃縮し、副産物のウラン238を黒鉛炉に送って、プルトニウム239を生産する全工程を、一切人の手を介することなく、全て自動で行なわれていました。

集中治療室で生死を彷徨っていた二人の工場スタッフが、障害も残さず回復し、その証言がマネージャーの罪状を更に補強しました。

当初のもくろみでは、二人の刑事を帰した後、自分たちの起爆で工場を破壊する予定だったが、核兵器製造の事実を知る自分たちも含めて、この世から葬り去られるところだったと説明しました。

プラスチック爆弾で、黒鉛炉の粉塵爆発を誘発するアイデアは、爆発物の専門家であるマネージャーが考えたようです。

取引の相手は、国際的な闇の兵器仲介組織、文字通り死の商人です。あの漂着船と通勤ボートを使って、二酸化ウランを受け取り、代わりに完成品の核爆弾、またはプルトニウム239・ウラン235の金属素材を送り返していました。

首謀者であるマネージャーが、取調官に語った事件の回想が、のちに公開されています。

「なぜ工場を爆破したのか？」という取調官の問いかけに対しマネージャーは、「製品と原材料の受け渡し方法が、少しでも発覚・露呈した場合、早急に設備を処分するのが当初からのプランだった、婦人刑事が工場の素性に疑いを持っていたので、人間も含めて証拠を抹消する必要が出てきた。」

「どうして日本で？」という質疑に対しては、「調達できる工業製品・化学素材の品質・数量・種類の豊富さに於いて日本以外では不可能だった。最も好都合だったのは、都市部を越えてローカル地域にも浸透しつつある人々の地域社会への無関心さだ。高齢化・過疎という社会背景が、我々に味方した。」



事件の全容が明らかになるに伴い、政府は特定機密保護法適用を解除し、全世界に向けて、事件詳細の開示を行いました。これは内々に事件の経過を通知していた、同盟国政府からの強い要請を受けてのことでした。

日本政府のこの情報開示は、深刻な核テロ警報とも受け止められ、瞬時に世界を駆け巡って、各国政府・機関は直ちに対応を求められる事態となりました。

「退院したその足で、ホームセンターに行くんですよ先輩——びっくりしちゃって。」

「同じメーカーの監視カメラ購入して、鑑識の若い子に頼んで細工して……。」

「バーナーで焼いたり、黒い塗料で汚したり……。」

「マネージャーの仕業だってどこで分かったんですか？」

「見てたのよ、監視カメラが最初に破裂するのを——。ストレージが直接インターネットに繋がっていて、ログインコードが工場長（マネージャー）の指紋だって、電気技師が言ってたじゃない。」

佐伯署の応接室で婦人刑事二人は、刑事部長と楽しく会話しています。

「ところで黒木、まだ答えを聞いてないんだが……。」

「工場を見学した理由ですか？——工場内部の放射線を計りたかったんです。」

と言いながら、ペン型の線量計を差し出した。

「密輸品が出て来てない段階で、専門的な強制捜査の令状を取るのは、それしか無いと思って……。」

「私が、走り書き文字のアイソトープの件を電話したからか？」

「先輩は、その前から文字の意味が二酸化ウランだって見当つけてたんですよ！」

「——確証は、無かったですけど。」

「その文字のことでね、白河君が撮影した写真には消えかかって写っていなかったようだが、続きがあるそうだ。——**800KG : JUL / 9 / 2025**——というんだが、意味が分かるか？」

「——2025年7月9日にイエローケーキ800Kg！原始的だけど確実な次回注文書だわ。」

一か月後、二人の婦人刑事は再びあの菩提寺を訪れていました。

好々爺の住職は、今日も本堂の板の間で、何事も無かったように煙管の煙草を燻らせています。

「そうかい、そげえな事があったかいのう……。」

「人がおらんけえのう。目配り出来んけえのう……。」

煙草の香りが、祭壇の線香の香りと混ざって、穏やかな時の流れを一層際立たせます。

「戦前は、お国の為ちゅうて砲台造らせちよったが、こんだ知らん士が誰んでん知らん間に、そげえなおじいもん造りよったかい。」

「ほんに、落ちとる葉っぱ一枚一枚にも気い使こうとかなあ、いかんわあ。何があるか、わからんわあ。」



漂着船が引き上げられた岸壁のボラードに腰を下ろして、黒木玲子が呟きます。

「ねえ笑ちゃん、あのガイドの二人どう思う？」

「どうって？」

「あの二人、私たちと同じじゃないかと思うの……。」

「……。」

「最初の爆発の後、耳の聞こえない私たちを、立坑まで引きずって行ったじゃない。」

「一緒に立坑に入るんだと思ったら、そのまま外から扉を閉めて……。」

「自分たちが死ぬのを、他人に見られなくなかったんじゃないかしら、死ぬ時だけは二人だけで居たかったんじゃないかしら……。」

目の前の水際で、猫が二匹じゃれ合っています。

「分かりました先輩！今晚は私が、使い古したあれで、ひいひい泣かせてあげます。大股開かせて、エビぞりにして責めてあげるわ、覚悟なさい！」

リアスの夕陽が、二人のシュルエットを紅く紅く染めていきました。

———終わり。

以上、全てフィクションです。

リアスの夕陽で泣かせてあげる！

<http://p.booklog.jp/book/105686>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105686>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105686>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ